

第61回学校読書調査:中村伊知哉・慶応大大学院教授に聞く 世界を知る入り口 マンガ文化の力 きょうから読書週間

毎日新聞 2015年10月27日 東京朝刊

27日から「読書週間」が始まる。毎日新聞が行った「学校読書調査」で、マンガが子どもたちの生活に定着し、知識の獲得にもつながっていることが浮き彫りとなった。内閣官房のクールジャパン戦略推進会議委員を務め、日本のマンガ文化にも詳しい中村伊知哉・慶応大大学院教授（メディア政策）に話を聞いた。【聞き手・木村光則】

――調査の結果、女子は小中高生とも友情・恋愛マンガがトップ。一方、男子は小学生がギャグマンガ、中高生が冒険・スポーツマンガと、違いが出ました。

昭和から、小学生の男子はマンガ週刊誌「ジャンプ」、女子は「りぼん」を読むなど、日本ではマンガのセグメントも趣味嗜好（しこう）も分かれています。あらゆるジャンルがあるのも特徴。ギャグからスポーツ、食べ物もあれば歴史モノも。これだけマンガ文化に厚みがあるのは日本だけだろう。

――マンガは活字に親しむきっかけになっているのでしょうか？

文字を使って表現するものに触れるということでは、マンガは入りやすい文化ではないか。しかも入ってみると非常に厚い文化がある。文字文化の豊かさや楽しさを伝える上で、絵と文字がセットのマンガは非常に機能が低い。新聞や小説などの文字文化にとってもマンガは重要ではないか。私自身、小学生の時から学習マンガが好きで、理科はほとんどマンガで学んだ。大学入試の勉強でもマンガが役に立った。読むことの楽しさをマンガで教えてもらった。

――監修を務めた100作品から知識は得られますか？

学習マンガではない大人が読むようなマンガでも学びにつながるよね、ということ。委員たちが議論を交わして選んだ。私自身、この年になっても、マンガを読んで「ああ、この世界ってこうなっているのか」と知ることがある。関連本を読み、関連記事に注目する。だから子どもには、こういうマンガを読み、と言うのではなく、ちょっと背伸びしてこんな作品を読んでみたら、と薦めたい。

――今回の調査で「時間のむだだと思った」との質問に、約9割が「いいえ」と答えました。昔と今では、マンガの見



中村伊知哉・慶応大大学院教授＝内藤絵美撮影

方も変わりましたか？

圧倒的に変わりました。私が子どもの頃だったら、「勉強の妨げになる」と思っていたでしょう。2002年、米国ジャーナリストのダグラス・マッグレィ氏が「日本は物づくり経済の国から、マンガ、アニメのポップカルチャーの国に変わった」と雑誌で語っている。その後、ハーバード大教授のジョセフ・ナイ氏が「ソフトパワー論」で「日本はポップカルチャーが一番有効なソフトパワー」と言い、日本文化の価値が向上した。そして、03年に政府に知的財産戦略本部ができた。それまでは国にとって、マンガ、アニメは規制の対象でしかなかった。その頃からマンガ、アニメを世界に発信しよう、という動きが広まった。

同じ頃、日本に留学する外国人の志望動機もがらりと変わった。ソニー、トヨタ、ホンダでの物づくりへの憧れから、「マンガ、アニメ、ゲームで日本が好きになりました」という学生が急増した。

――教育現場へのマンガの導入をどう考えますか？

いいと思いますね。先生の世代もマンガを読んで、いい影響を受けた方が増えたから、そういう動きも広がっている。私は「はだしのゲン」を中学1年で読んだけど、やけどで皮がむけ、ガラスが体に突き刺さった絵がどんな文字よりも心に残って、それが自分の原爆に対する最初の記憶となった。あの作品には賛否両論あるけれど、そういう作品を閉ざさず、子どもの目に触れるところに置くことは大人の役割だろう。

みんなでディスカッションするのも面白い。授業でマンガを描いてみるのもいい。私のかかわるNPOでは、子どもたちに作品を作ってもらって試みをしている。例えば、携帯電話で撮った写真を4枚組み合わせて、4コマ写真マンガを作る。日本とフランスで同じことをすると、フランスの子どもたちはかわいいファンタジーにあふれた作品を作るが、日本の子どもはほとんどがギャグマンガにする。互いの国の子どもたちにそれぞれを見せると、違う文化や考え方もあることが伝わる。

――どうしたら子どもの想像力を伸ばせるでしょうか？

日本文化のコンテンツの最も大事なところは原動力だ、という言葉はマンガ家から聞いたことがある。原動力があれば、1人であらゆる世界を作り上げられるのがマンガだ、と。その世界を映像などに応用していくことができる。そのためには、ポイントはやはりマンガの読み手が増えること。土壌があって、ファンがコミックマーケットに作品を持ち込む。その何十万人の中から1人の才能が生まれる。

日本のマンガ文化が豊かになったのは、読み手の感性が高かったから。江戸庶民が浮世絵を買っていたように絵に対する感度の高さが底流にある。その文化を大切にすることが大事でしょう。

=====

■人物略歴

◇なかむら・いちや

1961年生まれ。京都大経済学部卒。84年郵政省入省。インターネット政策などを担当。省庁再編に携わった後退官、渡米。2002年スタンフォード日本センター研究所長。帰国後は内閣官房知的財産戦略本部委員などを歴任。著書に「コンテンツと国家戦略」（角川E P U B選書）など。

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.